

INTERVIEW

三重県地域医療研修センター センター長
奥野正孝先生



地域医療第一世代、 ここにあり!

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

時代の申し子として残してきたこと

山田隆司(聞き手) 今日三重県伊勢市に奥野正孝先生をお訪ねしました。先生には10年以上前に地域医療振興協会(JADECOM)の研修センターが「島ワークショップ」を神津島で開催した際に講師としてお話しいただき、併せてインタビューに登場していただきました。

私にとってのこれまでの「地域医療」は、自治医科大学卒業後の自らの体験としての十数年、そして五十嵐正紘先生や奥野先生が地域医療学教室に着任されて「地域医療」ということが堂々と言えるようになった十数年、その後協会で名郷直樹先生や吉村 学先生などが「地域医療」を研修としてすすめてくれた十数年、大きく分けて3つの時期があったような気がします。今や協会で「地域医療」を学んだ研修医たちが一人立

ちして、実際に全国各地のへき地離島で活躍してくれています。ここに来る道すがら、私自身はそんなことを振り返っていました。

前置きが長くなってしまいましたが、先生が今、三重県やあるいは大学と関係しながらされている活動をお聞きし、これからの地域医療についても議論できたらと思います。

奥野正孝 最近は、紀南病院という田舎の病院の外来と、紀和診療所という山奥の診療所の所長として週2日、外来を受け持っています。また年間30～35人ぐらいの研修医が紀南病院に地域医療研修に来るので、その世話をしているという感じですね(笑)。それから県庁でへき地医療総括監という名前と机をもらって、週1回程度通いながら、三重大学などと共に県のへき地医療

関連のお世話をやっています。

なので、やっていることとしては、診療と、お世話と、地域に出て行くこと。ミニタウンミーティングと名前を付けて、その地域のできるだけ小さな場所、人口が20人とか30人というところを選んで毎月1回出かけて行って、そこの人たちと「元気？」とか「体、どう？」と2時間ぐらいおしゃべりをしてくる。また最近では、地域包括ケアの中で多職種連携が言われ始めているので、うちの地域のやり方でのんびりなんでも話ができる関係づくりを始めています。

山田 それは診療所のある地域ですか。

奥野 紀南全部です。

山田 広いですね。

奥野 そうですね。人口4万人で、でも昔は「老人が増える」ということでいろいろ対策を考えていましたよね。ところが最近では地域で往診が減ってきた。「なんでや？」と考えたら、人口がすごい勢いで減っているわけですね。

人口が少なくなってきた大変なのは診療所だけでなく病院もそうです。だからそれぞれ病院だ、開業医だというのではなくて、その地域として全体をみていく、あるいはお互いに補い合わない駄目だということが本当に分かってきた。そういう意味での多職種連携。あるいは例えばガス屋さんが毎月行く、郵便局の人は配達に行く。そういういろいろな人の力を使って、その「地域をみていく」ということを考え始めているのが、今面白いですね。

へき地の消滅が社会的に問題になっていますが、田舎というのは医者育てる最高の場所、宝の山なので、われわれからすると絶対になくしたくない。だから活性化とは言わないまでも、うまく残っていけるような方法をみんなで考えたいと思うのですね。

山田 30年くらい前までは、医者がいなくなってしまった田舎に医者が行けば地域が盛り返せるん

だと思っていました。私がいた久瀬村も、六合村も、名田庄村や哲西町などもそうなんでしょうが、行政と一緒にそれなりのハードを作って、医者が元気よくやれば地域興しのお手伝いができて、あとは行政と一緒に自分たちは一所懸命医者をやっていけばいいと思ってやっていた時代でした。今、地域の人口減少が予想をはるかに超えていて、われわれがお手上げとなる以前に行政のほうがお手上げとなって合併が進み、整理統合され、われわれの力の及ぶところではなくなってしまった。地域を継続させるためには、医療以外の生活そのものを下支えしなければならない難しい状況になっています。

奥野 だから何かをやったから再生のための起爆剤になるという時代でもないと思う。今ある物や人で効率よくその場所でやる。だから先が明るいわけでもないけれど、でも「なかなかへき地は消えてゆかない！」という気がします。私は結構しぶとく残っていくのではないかと思っているのですけれどね。

山田 そうですね。一方で30年以上前から自治医大卒業生が、高齢化の最先端であるへき地離島へ行って残してきたものは、今、地域包括ケアや総合診療医の議論の核になっていると思います。

奥野 われわれが何を残せたかということですね。私が自治医大へ戻ったのは卒業して11年目でした。その時、地域医療学教室で授業を受けた人たちが、へき地で働いて帰ってきた医者から授業を受けた初めての人たちだったわけです。そして私たちが地域から帰ってきた時、そこに五十嵐先生というすごく面白い人がいて、われわれが地域で体験してきたこととか、気合いとか、うまく伝えられないものを言語化してくれたのです。だから、へき地から帰ってきた医者から初めて授業を受けた若い人たちが育ってく